

車事故で亡くなったので長男に反対され、これだけは駄目でした。それでも今市に六十歳以上の人の団体で、今市OB山岳会という会がありましたので、私も六十歳から八十歳まであちらこちらと山歩きをして、心残りはありません。

終わりに今の心境を一言。

人の世の山坂道をふみ越えて

はや八十路の坂を二つ三つ越ゆ

しみじみとしわの数増すこの顔に

過ぎ越し昔の道のりを思う

紅白の球をタッチだスパークだ

老の頭を少しひねりつ

有為転変の人生

東京都 白井喜次

私は、一九二五（大正十四）年旧関東州の大連で生まれましたが、物心がつくころには父の職業の都合で仙台郊外の野戦重砲兵部隊の官舎に移り住み、そこから小学校に通学していました。小学校三年生の春、父は再び大陸に転勤になりましたが、そのときは母も私も妹もなぜか父と一緒にいかず、仙台の官舎に残っていました。

父は大陸に転勤してから約二年後の一九三七（昭和十二）年の暮れ、私が小学校五年生のときに戦病死してしまいました。

私たち親子は、やむを得ず土浦の近郊の農村に転居することになってしまいました。そこでは、祖父が小学校の校長を定年退職して村役場の助役をやっており、私たちは祖父の家の離家で生活することになりました。

た。生活は何一つ不自由はなかったのですが、小さな心にポッカリと大きな穴があいたようで、なぜか自分でも説明しにくいのですが、自分が生まれた大連が妙になつかしく、将来大きくなったなら大陸に行つて働こうという気持ちをもつようになりました。

中学校四年生になり、祖父と将来の進路について話し合いました。祖父は自分の進んだ道を進ませようと、県の師範学校に入り、教師になるよう勧めてくれました。私はそのときに初めて子供のころより抱いていた夢を祖父に打ち明けました。「中学校を卒業したならば大陸に行つて働きたい」と。祖父も大きな反対はしませんでした。

その頃の師範学校は四年修了で受験することができたので、四年生修了時に受験し合格しましたが、師範学校には入学しませんでした。一方で、大陸に行きたいという気持ちは、ますます強くなるばかりでした。

一九三六（昭和十一）年ごろより日本国内にはラジオで、映画で、歌謡曲で、大陸をおう歌する宣伝が巷にあふれ、黄土（満州国）に棄土を建設しようという

風潮がみなぎり、多くの若い人々が大陸志向になっていきました。私の心もますますその傾向に拍車がかかりました。

そのころ茨城県の水戸、鯉淵、内原地区には、大陸に進出する養成機関がとでも多くありました。「大陸教員養成所」「満蒙技術者養成所」「鉱工技術生訓練所」「満蒙開拓青少年義勇軍訓練所」などでした。

一九四二（昭和十七）年、私は満蒙技術者養成所に入所しました。短期間の養成期間を終了して、念願の大陸に出立することになりました。

神戸の三宮港より船で大連まで三日間ぐらいかかったように記憶しています。大連の棧橋に着岸して「着いたぞ！」と上甲板に出て、岸壁にたむろする苦力（港湾労働者）の姿を見たときの印象は、一生忘れることができないものでした。日本にいるときは想像もし得なかった異臭と異様な光景は、今も瞼の裏に焼きついて離れません。

さあ大陸に上陸です。私の生まれた大連です。幼きころの生活なので全く記憶にはないはずですが、自分

なりに想像していた町並み、風景、なにかもほとんど変わっていません。四日間ほど大連に滞在している間、市内を見学したり旅順の日露戦跡の見学などを行いました。

大連駅より満鉄の急行列車、新京行きに乗車。約十時間ぐらいかかったでしょうか、新京駅に到着。会社の迎えのバスで大同大街を南へ約二キロメートル行った所に、これから私が勤務する「満州国生活必需品株式会社」の本社がありました。この会社は特殊法人で、満州国と日本の出資によってできた会社で、外国、主に日本からの輸入生活必需品、満州国内生産の生鮮食料品（野菜、果物、魚介類）などのほとんどを「生必需品」の市場で取り扱っていました。

苹果（リンゴ）・梨子（ナシ）など果物や野菜が出る季節となり、私は満州国と関東州の国境の町、南満州の小都市瓦房店に長期の出張を命ぜられて赴任いたしました。瓦房店は満鉄の幹部が多く住んでいた瀟洒な町で、この町を拠点として田家・得利寺・態岳城・蓋平などの地で満人（中国人）の農園や果樹園、興農

合作社（日本の農協に似た組織）から果物・野菜の買い付け（当時は検収と言った）をし、買い付けたものは満州国内の各都市の市場に発送しました。

私の仕事は主に果物の検収でした。通訳はつきませるので、どうしても満語（中国語）を話せることが必要です。必須条件の満語は相当の勉強をしてみたのですが、週に三日ほど南満州の大都市奉天にある奉天工業大学の夜間の聴講生となり、満語とロシア語を少し勉強しました。終戦後に、少しばかり勉強をしたロシア語が役に立とうとは、夢にも思いませんでした。私はハルビンに転勤になった時に、ハルビンには白系ロシア人が多いので役に立つだろうとの軽い気持ちでロシア語を勉強したのです。

人間、必要に迫られれば覚えるのは早いものです。我ながら満語の上達は早かったようです。満人に「あなたは本当に日本人ですか？」とよく聞かれ、私も冗談に「日本生まれの満族です」と言うと、「どうりで発音がうまい」と、いつの間にか満人（中国人）の間では満族で通っていました。

現在の中国には六十二の少数民族が住んでいるといわれておりますが、そのうちで満族は約二百五十万人ぐらいたそうです。主に中国東北地区（旧満州）に住んでおり、残りの少数が辺境地区ウルムチ地方に住んでいるそうです。辺境地区に住んでいるのは、清朝時代、防衛兵に派遣された満族の末裔だといわれております。

姓も白（bai）という姓が割合に多く、私の姓が白井という姓なので白を姓として、井はジン（jing）と発音するので中国語の景（jing）を名として白景と名乗り、今も中国では「白景」で通っています。

約二年間、仕事で満州国内を東西南北と歩きまわり、多くの漢族、満族、オロチョン族たちと友人関係ができました。終戦後にいろいろと助力いただいた朋友もできました。

一九四三年秋に、私は北満州の海拉爾の独立守備隊に入隊、甲種幹部候補生となり、内地の予備士官学校に行く予定でしたが、大東亜戦争の戦雲低く垂れこめ、

緊迫した中で内地には行くことができず、そのころできたばかりの関東軍の石頭予備士官学校に入り、卒業後もその学校に残り、後輩の指導にあたりました。

日曜日には上官や同僚とよく一緒に外出しましたが、言葉が分かるということで大変に重宝がられ、休日の前などには誘いが多くなりました。

真偽のほどは分かりませんが、もう既に亡くなられた韓国の故朴大統領も石頭予備士官学校の出身だと、ある韓国の人に聞きました。風雲急を告げるころ、朝鮮出身の幹部候補生も幾人かいたことは確かです。

一九四五（昭和二十）年八月、大東亜戦争の終結の日六日前に、ソ連軍は突如として満州国に侵入してきました。これを迎え撃つために私の勤務する予備士官学校にも動員が下り、石頭駅より無蓋貨車に乗せられて、牡丹江の東方、磨刀石の山中に急造の「蝟壺陣地」を構築して、ソ連軍を迎撃する戦闘態勢をとりました。ある夜、見習士官を長とする候補生の決死隊が編成され、前線に出て行きましたが、帰還してきた者は一人もいなかったようです。

捕虜となり、ウスリノスク近くまでの長い行進中に、満州国内の沿道で、真っ黒に腐乱して異臭を放つ日本兵士の死骸を数多く見ました。襟に候補生の記章が鈍く光っている死体も多数見受けられましたが、敗者の捕虜の身ではどうすることもできず、ただ黙々と行進するだけでした。

一九四五（昭和二十）年八月十三日の黎明に撤退命令が下り、横道河子の陣地まで撤退することになり、牡丹江橋を工兵隊が敵戦車の進行を阻止するために爆破するという寸前に橋を渡り、高粱畑の中を西へ西へと向かう途中で、ソ連の地上攻撃機から幾度か機銃掃射をうけて幾人かの将兵が死傷しました。

私は、撤退の途中で一頭のはぐれ馬を見つけました。轡はつけていますが、鞍は無く、多分日本軍の馬であるうと思われる裸馬にとび乗り、今度は遠回りでも地図たよりに山の中を横道河子にむかって進みました。八月十七日に横道河子で武装を解除され、馬はソ連軍将校が乗って行ってしまいました。

横道河子より海林の收容所に移送され、ソ連軍の検

査をうけることになり、その間ハイラルの独立守備隊の将兵とも接触することができましたが、多くの戦死者を出したとのこと。確かあの部隊は九州熊本出身の兵が主力の部隊だったと記憶しています。

昼は禁じられている收容所の柵をくぐって満人部落に入り、食料を買い情報を手にいれようとなりましたが、情報は乱れ、確かな情報はつかめませんでした。ある満人は、「日本人がソ連を通って続々日本に帰っている」と言い、また別の満人は「ソ連に連行され強制労働をさせられた後で殺される」とか、確かな情報は全くつかめません。

ある日、どこで私の身元を調べたのか、私が收容されている天幕にソ連軍の黒縁帽をかぶったG P U（ソ連の国家政治保安部）の少尉「レチナント」がやってきました。彼は私に協力してくれということです。彼の名は「シコヴィッチ・イワノフ」と名乗りました。私は一番気になっていることを彼に質問しました。彼は「ウラジオストックから日本に帰す予定だ」と真面目にいうのです。ただ「ここ海林から綏芬河まで戦禍の

影響で列車が不通になっている。ウスリースク近くまでの約二百キロメートルを徒歩で行進せねばならぬ」とのこと。これは年月が経て後で分かったことですが、実は鉄道は異常なく運行していたのですが、日本軍からの占領捕獲品をソ連領内に輸送するために鉄道を**使用、捕虜は歩かせるというソ連上層部の方針**だったようです。またウラジオストックは今でこそ開放されましたが、当時は極東最大の要塞港です。あの秘密主義のソ連が旧日本軍を入れるわけはありません。

あの国の特徴で、GPUといえども下級将校では命ぜられるままで、何も分かっていなかったのでしょう。当時の事情を説明する人によって多少の誤差はあるのでしょうが、六十余万人の関東軍将兵が戦後のソ連復興のためにこのようにして連行されたことは事実です。秋も半ば過ぎるころ、我々のグループはシベリアの最大の都市イルクーツク近郊のラーゲル（収容所）に入れられました。ここに到着するまでに幾人かの戦友が疲労や栄養失調で死んでいきました。イワノフ少尉は我々が輸送貨車に乗車したことを確認した後、別命

が出たとのことで別れていきました。

一カ月ほどイルクーツクに滞在していたでしょうか。我々はいくつかのグループに分けられて、私はシベリア鉄道と旧東支鉄道の分岐点になっているカリムスカヤという小都市の国営農場（ソフホーズ）に移され、また二カ月後にはボルジャという小さな町のソフホーズに移されました。ここには中国系「キタエッツ」と朝鮮系「コオリヤニッツ」の人々が多く働いていました。ボルジャから中国の満洲里まではソ連国境の町ジャベルスカヤを過ぎればすぐそこなのです。

ソフホーズでは馬鈴薯（カルトシカ）を播く季節になりました。ある日、私は「キタエッツ」と思われる作業員に中国語で話しかけました「あなたは中国系か」と。彼はロシア語で「そうだ」と答えました。この国も中国と同じ多民族国家で、同じ民族同士では母国語で話をする習慣があるようです。朝鮮系は朝鮮語で、ウズベック系はウズベック語で、もちろん中国系は中国語で会話をします。

いつ日本に帰されるのか全く目途がつかない、毎日

不安の連続でした。日本に帰ることがかなわぬのなら、満州に行きたい。どうしてもソ連にはいたくない。満州には朋友もたくさんいるし、満州は私の第二の故郷なのです。満州に近い所に住んでいるという気持ちからか、帰心矢の如しでした。

そうしているうちにキタエツツの人とも中国語で打ち解けて話をするようになっていきました。彼の名はロシア名「セルゲネフ」と言い、祖父の代にソ連に渡ってきたようです。ある日の休み時間に私はセルゲネフに話し掛けました。「実は私は大連生まれの中国系の日本人のだが、日本に行くことができないのならば、中国に帰してもらいたいと思っている。よい方法はなにかかね」と。外国に住む中国の人は民族意識がほかの外国人よりも非常に強いといえます。セルゲネフも親身に話にのってくれるようになっていました。彼は私に「やっぱりそうか。前から私もそうではないかと思っていた。中国はどこに行きたいのか?」と、尋ねました。私は「奉天」と答えました。

そのころのソ連と中国は、一枚岩の団結を誇ってい

ました。まるで連命共同体の国家のようでしたので、私の話もスムーズに進んだらしく、ソ連の軍医大尉「ドクトルキャピタン」が私のところに来てきて、ロシア語と中国語のチャンポンでいろいろと質問しました。「中国に引き取り人はいるのか。どこにいるのか」と。私は直感でこれは帰れるぞと思いました。奉天工業大学を卒業して、多分ハイラルにいるはずの張安山の名を告げました。ただし戦後の混乱で現在どこにいるのかも全く見当がつかないということも付け加えました。

終戦後十カ月経った六月中旬に、再度ドクトルキャピタンに身体検査をうけ、彼に連れられて満洲里に向かいました。どういうわけか国境の町ジャベルスクで列車から降ろされ、今度はアメリカ製のジープで満洲里に向かいました。

間もなく国境線に到着、国民党軍の将校に私は引き渡されました。簡単な取り調べをうけて約半日後の夕刻に張安山が迎えに来てくれて、二年ぶりに彼と再会することができました。

彼は農業機械の技術者として、ソ連製のトラクター工場の工場長をしていたのです。ソ連にとっても中国にとってもいろいろな意味で重要な人物になっていたのです。なるほどほとんどん拍子で私の身柄引き渡しが進んだのは、このような裏があったからでした。

一九四六年の夏ごろから、国民党と共産党の戦いが東北地区「旧満州」で始まったようです。いわゆる国共内戦が満州地方にもおよんだのです。

一九五六（昭和三十一年）五月、故周恩来首相が日本人向けに「一部の日本人には深く感謝している。彼らは医師として、技術者として、看護婦として、解放の戦士として、中国の解放に参加してくれたことを中国人は決して忘れない」と発表しております。

私は思想的には何一つ勉強していません。「早くこの国が落ち着いてもらいたい。そして日本に帰してもらいたい」との気持ちで、一九四六年の末に、齊々哈爾で張安山の紹介のもと八路军の第四野戦軍に入りました。総司令は林彪でした。

一九四六年から四八年にかけての内戦は、都市を奪っ

たり（解放）奪われたりの連続でした。昨日は東、今日は西の戦いが繰り返されました。そのころより私は正義の戦争について勉強をし、いくらか分かってきたようです。すべてが人民のため。

私の仕事は宣撫工作でしたから、意識をしっかりと持っていないとできない仕事でした。もし国民党軍が勢力強く一時的にせよ撤退を余儀なくされたときでも、農民・労働者・一般人にはよい印象を与えておく必要があります、自分の行動も律しなければなりません。

軍律は旧日本軍の軍規より厳しいものでした。「三大規律と八項目注意」が厳格に守られ要求される軍隊でした。

「三大規律」とは

一、命令に服従すること

二、農民からは針一本、糸一筋といえども取ってはならない

三、敵から没収したものはすべて軍、党に提出しなければならぬ

「八項目注意」とは

一、泊まった民家を出るときは、寝る前に使用した

戸板など必ずもとの位置に戻すこと

二、人民に対しては言葉づかいを丁寧に、できるこ

とは手助けせよ

三、借りたものは必ず返せ

四、壊したものは弁償せよ

五、取引は正直にせよ

六、衛生を重んじよ

七、婦人をからかったりしてはいけない

八、捕虜を虐待してはいけない

このような軍隊ですから、内戦が始まった当時にはたった十一万人余の兵士が、三年後の瀋陽「奉天」解放作戦時には百万余人の兵士になっておりました。日本軍や国民党軍と違い、八路軍は武器を携行したままの投降兵は戦力拡大に役立つとして、その武器で敵に当たらせました。「昨日の敵は今日の友」となっていたのです。

一九四八（昭和二十三）年十月より解放軍（一九四九年一月より八路軍は人民解放軍と改称）は瀋陽の解

放作戦を始めました。私にとって懐かしい奉天です。

一九四九年一月に熾烈なる攻防戦を経て、瀋陽を全面解放に導きました。

私たち宣撫班は旧日本人街、城内、北陵と懐かしい地区で工作いたしました。瀋陽には春、五月まで工作しておりました。東北地区は瀋陽を解放したことにより、全面的な解放がほぼ完了し、五月に私はしばらく滞在していた瀋陽を出発、命をうけて山西省の大同に行きました。

毛沢東首席が天安門上で、中華人民共和国を成立宣言した十月は、山西省の応県で旧日本軍の兵站基地の調査をやっておりました。神池、陽曲、榆次と南下し、太原でしばらく工作しておりました。主な仕事は旧日本軍の残っていた隠匿物資の探査ですが、ほとんどが国民党軍が奪っていった後でした。

一年半ほどの間に山西から河南、湖北と南下して、帰国の約束のもとに広東に入り佛山、高明、珠海、中山と同じような工作をしながら、一九五一（昭和二十六）年香港より英国籍の貨物船で、一九四二年に満州

に出発した港、神戸三宮に帰ってきました。

日本に帰ってきましたが不景気の最中でした。東京芝浦の遠戚にあたる君島さん方に下宿をして、今で言うアルバイトをしながら茗荷谷の拓殖大学に名目的な証書を取ろうと入学しました。中学時代と満州生必会社時代、柔道部に籍を置いていたのでいくらかできたものですから、拓大でも柔道ばかりやっておりました。拓大を出てからは、川崎の町道場、斉藤道場で師範範理などをしておりました。

一九七二（昭和四十六）年春、国交正常化する前年に約二十年ぶりに香港経由で大陸に渡りました。目的は中国に永住する決意と、国共内戦中にでき得なかつた戦病死した父を開封に墓参すること以外に、私なりの残留同胞の動向調べです。

厚生省によれば一九四五（昭和二十）年満十三歳未満の人を残留孤児として扱い、国策で渡った者、若い看護婦、私のような者などは特別なケースにされているのです。このような人々が大陸にはいまだに相当な人数が残っていると思われれます。しかも私も含めてこ

の人達は年々歳々年をとっていくのです。

私はまず中山県の農村にいる王さん（日本名鈴木さん昭和四十六年五十歳前後）を訪ねました。彼女の出身は横浜で、終戦時河南省の新郷陸軍病院で看護婦をしていて、終戦時日本に帰るべく列車に乗りましたが、とある駅で彼女一人がひきざり降ろされ、持ち物は略奪され、その上暴行されて死を覚悟していたときに、中山県より働きにきていた農民出身の王伸民さんに助けられ、その後生活を共にするようになり子宝にも恵まれ、なんとか生活しているとのこと。横浜の実家には二度ほど手紙を出したが返事がこないとのこと。多分米軍の空爆で一家全員が死亡してしまったのでしよう、もうあきらめられていると言って泣くのです。一九九三（平成五）年に用事で広州まで行ったついでに、彼女の家まで行きましたが、既にそこにはいらっしやらず、別の人が住んでいました。その人に鈴木さんの行方を尋ねましたが分かりませんでした。息子さんもおられたことだし、幸せに暮らしてしてくれるよう祈るのみでした。

解放戦争中、国共内戦の当時、山西省の応県地方に
工作に行ったとき、小学校の教師をしており、「日本
人でありながら中共軍の工作員とは」と、多分侮蔑の
まなざしで私を見ていた莫さんという人がいました。
実は彼は大の親日家で、文革が終了した一九七九年の
末に前もって手紙を出して、応県に行ったのですが、
老齡にもかかわらず大同駅までバスで数時間もかけて
迎えにきてくれました。夜、酒宴の折に莫さんは、数
年前まではとても言うこともできなかったことを平気
で言うのでした。「日本軍が応県城に入城したときは
日の丸で迎えた。日本軍は規律が正しかった。文化大
革命のときは反革命者とし吊し上げられ、とんがり帽
をかぶせられて、町中をひきずり回された。日本の大
陸政策は間違いだらけだった。満州地区だけで満州国
を作ればよかったのだ。中国大陸に手を伸ばしたのが
大きな誤算であった。白景が一九四九年にこの地にき
たときには、日本人でもこういう人がいるんだと思っ
た」などなど、日本人の私が聞いても酒の勢いとはい
え、びっくりするようなことを滔々と言うのでした。

いま十二億余の人民がいる中国ですから、意見はいろ
いろあってもよいと思います。しよせん中国のような
大きな国では思想を一本に統一することは無理
なことです。指導者がだれのための指導者なのかを見
間違わないことです。

一九六六（昭和四十一）年ごろから七五年ごろまで
続いたあの熾烈な文化大革命。子供のような紅衛兵に、
知識人や外国系の人、外国人の血が入っているとい
うだけで、有能な人々が吊し上げられ迫害を受け、大変
なる迷惑を被ったことは周知のことです。

新中国の成立時に私は少しなりとも役に立ったとい
うことでしょうか？ スパイ扱いはうけず拘束される
こともありませんでしたが、約十年の間は自由な行動
は自分なりに慎んでおりました。

当時私は天津に住んでおりましたが、一九八〇年の
春、文教部より打診され、大連の業余体育学校と瀋陽
の東北体育学院で柔道を教えてくれないかとのことで、
大連に引っ越しをすべく天津より船で大連に渡りまし
た。大連はちょうどアカシアの花が街中に咲き乱れ、

アカシアのかぐわしい香りにみちあふれていました。

港も街も家も日本の統治時代と全く変わっていませんが、ただ住んでいる人が変わっていました。そうです、住人は全部中国の人々なのです。住宅事情の都合でしょう、日本人が一家族住んでいた家には、中国の人々は三から四世帯が部屋を分けあって住んでいます。

同じ日本人でも祖父母の代にこの地に渡ってきて、日本には全く知人も親戚もないという人々が相当残っているとのうわさを聞きました。ある日、私はうわさの一人、日本女性に会うことができました。彼女も中山県の鈴木さんと同様に中国の人と結婚して子供も大きくなっていましたが、鈴木さんと違って日本に未練がましいことは一言も言いませんでした。彼女の名は今井さんといいました。祖父が大連に渡ってきて、祖母は朝鮮生まれの日本人だそうで、彼女の父母も今井さん本人も日本には一度も行ったことがないとのこと。祖父母も父母も大陸で亡くなったので、日本に行きたいと思ったこともないとのこと。自分の意思で中国の人と結婚、今は一家全員が幸せですと話していま

した。こういう人もいるというのも事実です。

今井さんの紹介で同じような境遇の女性に会うことができました。彼女は山崎さんといって終戦後に日本に帰りたいと思っただけで、日本に身寄りとしてなく、帰国する術も分からず、長い間この国に残ってしまいましたと、泣き崩れるのです。私は日本の厚生省や大連市政府に事情を申告してみなさいと話しましたが、その後どうなったか会うことがありませんでした。昔気質の人が多いのか、自分で名乗り出られず年老いていく老齢の同胞が東北地区に以外に多いように思うのです。

大連、瀋陽を拠点として満州（東北地区）の老朋友を仕事の合間に訪ね、またあるときは残留同胞を訪ね、犠牲者の出た跡を訪ねて歩きまわりました。

大連に近いところにある瓦房店は、私が満州で初めて仕事をした懐かしい場所です。閑静な街は一変して工業都市に様変わりしていました。中国でも有数な乗合バス製造工場などがフル操業していたのです。

近郊の農村を訪ね、知人の農民も多数いましたが、

ほとんどの人たちは老齡となり、子供さんやお孫さんの時代になっていました。

中国人が経営する果樹園としては「大」の部類に入っていた李徳志さんのところを訪ねました。李さんは私より大分年輩なのですが夫妻とも元気で、仕事はお孫さんがやっているとのこと、涙を流して再会を喜び合いました。

瀋陽、哈爾浜、長春などをまわりました。長春では八路軍時代に知り合った梁堅保さんを訪ねました。彼は八路軍の内科軍医をやっておりましたが、いまは白求思医科大学の教授なのです。彼はドイツにも留学したことのある優秀な医師です。「白求思」とはカナダ人の医師で、名を「ペイチユウイン」という人で、その一生を八路軍に捧げた功績を讃えて中国語の発声音で「白求思」と医大の名称にしたのだそうです。同医大は旧満州国の国務院の建物をそのまま使用しています。新京を知っている人は多分想像がつくでしょう。純然たる日本風の建物です。

梁さんを訪ねたあと、ホテルに帰るべく外にでると、

門の外で老人が、自転車の後ろの荷台に氷菓の箱を積んで売っていました。一本買い求め、解放前にここに住んでいたことがあると言うと、彼は「あなたは日本人？」と聞くのです。「そう、この学校に友人がいてね」と話すと彼は日本語で「私は満拓の本社にいた黄ですが、解放後はよいことがあります」と、医大から出てきた私を警戒するような目つきで話すのです。額の皺が幾星霜の苦難の道を物語っているようで、私も長春の終戦時の模様など聞こうと思いましたが、とてもそのような雰囲気にはなりません。

方正県の趙春台さんの家を訪ねたことがありました。方正県の大量殺戮は、日本ではソ連軍の急襲と集団自決の面説があるようですが、集団自決が真相のようで、死にきれずに日本人母子が趙さんの家に助けを求めてきたそうですが、彼はかかわりになることを恐れ、家の中へ入れなかったそうです。同じ部落の農家に引き取られました。母親がまもなく死亡すると、商売気のあるその農民によって、五、六歳ぐらいだった女の子は哈爾浜の人に売り渡されていったそうです。

瀋陽、大連で柔道を教え、教え子の中には韓国京城でのオリンピックに参加し六位入賞した子も、またバルセロナでメダルを取った女子もいました。

中国に骨を埋めるつもりでいたのですが、一九九五(平成七)年八月に、事情があり中国で結婚した妻と子供一人を連れて日本に帰ってきましたが、帰る前に人民日報で「日本軍の残置した化学兵器が東北で、華中で大量に見えられた」と、毎日のように報道されていました。戦後半世紀以上も経過していますが、残留孤児、残留婦人などの問題を含めて、まだまだ戦後は終わっていないと痛切に感ずるところです。

大連からの引揚げ

東京都 千葉 徳子

渡満から終戦まで

私は昭和五年東京で生まれ、家族は父母と兄二人の五人で、父の職業は社会事業関係だったので収入が少

なかった。家は自分のものであったが、その職場には将来子供たちを十分に教育していけそうもなかった。そこで、両親は渡満することを決意し満鉄(南満州鉄道株式会社)に職を得た。私が数え年十六歳のときだった。

父の最初の赴任地は新京(長春)で、私は翌年その櫻木小学校に入学した。間もなく夏休みに父の転勤で四平街市に移り、その学校に転入したが、三学期ごろに再び大連へ転勤となり、下藤小学校に転入し、以来芙蓉高等女学校を卒業し、引揚げまで大連に在住した。

満州での生活状態はぜいたくではないが、内地に比べて物資が豊富で暮らしやすかった。父が満鉄の身元保証金(社内貯金)に、収入のかんりの部分を預金してしまうので、その分だけ家計をつまなければならぬといとよく母がこぼしていた。しかし、そのようにしてきりつめたためた身元保証金も終戦ですべて無に帰ってしまった。それを使っていれば、かなり余裕のある生活ができたものと、今もって残念な思いである。し